



フランク・ブラングィン《松方幸次郎の肖像》1916 油彩、カンヴァス 国立西洋美術館（旧松方コレクション）
©David Brangwyn

国立西洋美術館の 礎を築いた男

松方幸次郎と「幻」のコレクション 100年の軌跡

「西美」の愛称で親しまれている国立西洋美術館が今年6月で開館60周年を迎える。東京・上野の森に端正な姿でたたずむこの美術館の創設の礎に、神戸ゆかりの一人の男の存在があったことはあまり知られていない。

川崎造船所（現川崎重工業）の初代社長などを務めた神戸の実業家、松方幸次郎（1866〜1950年）。20世紀初頭のヨーロッパで膨大な美術品を収集し、日本での私設美術館建設を思い描いた。だが、1万点を超すコレクションは散逸、焼失、没収―と流転の運命をたどり、100年を経ても解けない謎が残されている。

日本を代表する美術館の成り立ちに深く関わった松方幸次郎とは、どんな人物だったのか。その半生とコレクションの全容に迫る「松方コレクション展」の開幕を前に、松方が追いかけた夢の航跡をたどってみたい。

（神戸新聞東京支社編集部長 勝沼直子）

美術館建設の夢

松方は1866年、旧薩摩藩士で明治政府の大蔵大臣や首相を歴任した松方正義の三男に生まれた。アメリカの名門エール大学で法学博士を修めた明晰な頭脳の持ち主。型破りな行動力。鹿児島弁まるだしの気取らない人柄。時にワンマンとも傲慢ともいわれながら、人を引きつけてやまない人物像が浮かび上がる。

帰国後は30歳で川崎造船所の社長に迎えられ、アメリカ



松方幸次郎



国立西洋美術館の外観

©国立西洋美術館

カ仕込みの合理主義と周囲の度肝を抜くような積極経営で、神戸の一造船所を明治末には世界的な企業に押し上げた。

第1次大戦前夜の1914年、松方は造船界の常識を破り、注文もないのに大型船をどんどん建造するストックポット方式に打って出た。戦争で輸送船が不足した欧米から注文が殺到する。そういらんだ賭けは当たり、巨大な利益をもたらした。これが美術品収集に突き進む糧となる。

総数1万点を超えるといわれるコレクションは、松方が仕事でロンドンに滞在していた1916年ごろから始まり、約10年間に集中的に買い集められている。パリではロダンの代表作をほとんど手に入れた。投じた購入費は現代でいうと数百億円に上ったとの説もある。英語に堪能で交渉上手、神出鬼没の「ミステリアスな日本人」として、画商たちの噂的だったと伝わるのもうなずける。



前庭には《地獄の門》(右)や《考える人》(左)の拡大作などロダンの彫刻が野外展示されている=東京都台東区、国立西洋美術館



クロード・モネ〈睡蓮〉1916年 油彩、カンヴァス 国立西洋美術館(松方コレクション)



ピエール＝オーギュスト・ルノワール〈アルジェリア風のパリの女たち(ハーレム)〉1872年 油彩、カンヴァス 国立西洋美術館(松方コレクション)

松方を駆り立てたのは、留学もままならない日本の若い画家たちに本物の西洋美術を持ち帰って、見せてやりたいという熱い思いだった。「元来「絵のことは分からん」と公言してはばからなかった松方にとって、美術収集は趣味でも、所有欲を満たすためでもなく、集められるだけ集めて人々に公開するのが、財をなした自分が果たすべき使命と考えていたようだ。どんな名画を手に入れても自宅には飾ろうとしなかったという。

当初は創業の地・神戸に、後には東京・麻布で「共楽美術館」と名付けた私設美術館の構想を描いたが、金融恐慌などの影響で社業が傾き、夢は幻に終わった。

名画たちの受難

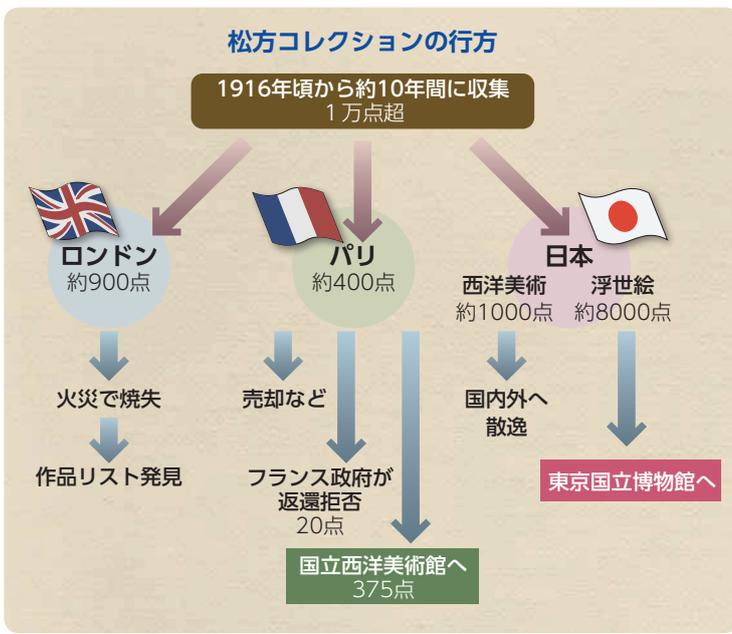
コレクションは、その後、数奇な運命をたどる。パリの宝石商から買い取った浮世絵約8000点は、宮内省(現宮内庁)を経て現在の東京国立博物館に一括収蔵されたが、それ以外の西洋美術は、戦前から戦中にかけて、日本、パリ、ロンドンに分散保管された。

パリに残された絵画、彫刻など約400点は、第2次世界大戦末期にフランス政府に敵国財産として接収され、戦後の政府間交渉の末、375点が日本政府に返還された。ゴッホやゴーガンの重要作品は、フランスが自国の美術館に取り置いたため手放さなかったが、それでもモネの「睡蓮」、ルノワールの「アルジェリア風のパリの女たち」、ロダ

ンの「地獄の門」など、その後の国立西洋美術館の支柱をなす名作が数多く含まれていた。

フランス側が出した条件は、これらの作品を収蔵・展示する美術館を日本政府が建てること。こうして生まれた国立西洋美術館だが、建設地を巡って当時、神戸市が国に誘致を働きかけた経緯もあったと知れば感慨深い。

一方、先に日本に送られていた約10000点は、松方が経営難の責任をとって川崎造船所社長を辞任した1928年以降、銀行の差し押さえを受けて次々に売却され、国内外に散逸した。これらは「旧松方コレクション」として区別され、所在が分からなくなった作品も少なくない。ロンドンの倉庫に預けていた約9000点は、1939年の火災で焼失してしまう。その数も内容も不明だったため、長らく「幻のコレクション」と呼ばれることになる。



解き明かされる謎

松方が収集を始めてから百年の時を経て、コレクションの全容に迫る画期的な発見が相次いでもたらされた。2016年2月、国立西洋美術館の調査で、ロンドンのテート美術館アーカイブ閲覧室から全作品の作家名、タイトル、評価額を一覧にしたリストが見つかった。記載されていたのは絵画、彫刻から家具・工芸品まで玉石混交ともいえる計953点。中でも松方の美術収集の指南役で、友人でもあったフランク・ブラングインらイギリスの作家が多数を占めた。印象派などフランス美術中心のイメージが強い松方コレクションの、新たな一面が明らかになった。焼けてしまった作品を見ることはかないが、コレクターの道を前のめりに歩み始めた松方の姿を想像することができる。

同じ2016年の9月、松方コレクションとして存在は知られていたものの、行方が分からなくなっていた、もう一つのモネの「睡蓮」がパリのルーブル美術館で発見された。なぜかフランス政府の所有になっておらず、2017年、松方家を通じて国立西洋美術館に寄贈された。



クロード・モネ《睡蓮、柳の反映》1916年 油彩、カンヴァス 国立西洋美術館 (旧松方コレクション)



モネと松方 (「火輪の海」より、1921年ごろ)

モネから直接購入

損傷が激しく、カンヴァスの半分は失われているが、本来の状態ならば現在、常設展示されている「睡蓮」(2×2^{1/2})の2倍以上の大作だったと推測される。あまりに傷んでいたためか、日本への返還リストにも、フランスの取り置きリストにも含まれなかった「幻の睡蓮」。現在、同美術館で修復作業が進められている。

モネと松方の交友関係を抜きに松方コレクションは語れない。モネは晩年、画業の集大成となる「睡蓮」大装飾画(パリ・オランジュリー美術館所蔵)のために多数の関連作品を描いた。今回発見された「睡蓮、柳の反映」もその一つとされる。モネはそれらを売りたいがらないばかりか気に入らない作品は破棄してしまったという。

松方コレクションに含まれる二つの「睡蓮」は、どちらも松方がパリ郊外のアトリエを訪ねてモネから直接購入したことが確認できる、きわめて例外的な作品だ。晩年を迎えた印象派の巨匠と、日本から来たワンマン社長。リラクセスした様子で写真に収まる2人の間に、どんな語り合いがあったのだろう。

松方は晩年、ふと思いついたように「フランスに行くてこなきやいかん」「絵を整理して持って帰る」と口にするのがあったという。自らの名を冠したコレクションの帰還と、その安住の地となる国立西洋美術館の完成を松方が見届けることはなかった。

「松方コレクション展」が6月に開幕

最新の研究成果を盛り込んだ「松方コレクション展」が、国立西洋美術館の創立60周年を記念して6月11日から始まる。意外なことに、同美術館で松方コレクションに焦点を当てた大型展が企画されるのは、開館1周年の1960年以来という。



アンリ・マティス《長椅子に座る女》1920-21年 油彩、カンヴァス パーゼル美術館
Photo© Kunstmuseum Basel - Martin P. Bühler



フィンセント・ファン・ゴッホ《アルルの寝室》1889年 油彩、カンヴァス オルセー美術館
Paris, musée d'Orsay, cédé aux musées nationaux en application du traité de paix avec le Japon, 1959 Photo© RMN-Grand Palais (musée d'Orsay) / Hervé Lewandowski / distributed by AMF

国立西洋美術館は世界文化遺産

1959年に開館した国立西洋美術館は、建物そのものの重要性も見逃せない。20世紀を代表するフランスの建築家ル・コルビュジエが設計した建築作品として2016年にユネスコの世界文化遺産に登録された。コルビュジエが提唱した「近代建築の五つの要点」を具体的に表現し、展示品の増加に合わせて渦巻き状に増築していく「無限成長美術館」の思想を形にした希少な例とされ、日本の近代建築運動に大きく貢献したと評価された。



上空から見た全体像

©国立西洋美術館



本館1階の「19世紀ホール」。吹き抜けの空間にロダンの大小さまざまな彫刻が展示されている

©国立西洋美術館

正面入り口のピロティをくぐって館内に入ると、吹き抜けが開放的な「19世紀ホール」が出迎える。螺旋状のスロープを抜けると2階には四角い展示室をぐるりと一周する回遊空間、高さの異なる天井やところどころ途切れた壁の配置など、複雑な空間の変化を楽しみながら作品を鑑賞できる。

所在地 東京都台東区上野公園7の7
開館時間 9時半～17時半
金曜・土曜は20時まで
休館日 月曜日(休日の場合は翌火曜日)
URL <http://www.nmwa.go.jp/>

オルセー美術館の至宝ともいえるゴッホ「アルルの寝室」などフランスが返還しなかった傑作や、戦前から戦後にかけて各地に散逸していった旧松方コレクションの数々が国内外の美術館や個人の協力を得て再結集する。修復されたモネ「睡蓮、柳の反映」も初公開されることになり、見どころは満載だ。

一見脈絡がないように感じる松方コレクションだが、国立西洋美術館の主任研究員、陳岡めぐみさんは「自分の好みにとらわれず、日本人に西洋文化そのものを伝えようとする松方の社会教育的な視点で貫かれている」と

解説してくれた。展示は、コレクションの形成と散逸、美術館の創設に至る時間軸を美術作品や歴史的資料など約160点でたどる「松方展の決定版」といえる。松方が抱いた夢のスケールの大きさと志の高さに触れる貴重な機会になりそうだ。

【主な参考文献、資料】

- ・「火輪の海―松方幸次郎とその時代―」（神戸新聞社・編）
- ・国立西洋美術館公式ガイドブック（淡交社）
- ・国立西洋美術館60周年記念「松方コレクション展」開催概要

〈松方コレクション展〉

6月11日～9月23日

(毎週月曜、および7月16日は休館。7月15日、8月12日、9月16、23日は開館)